



アルベルゴ・ディフーズの起源は震災による過疎化

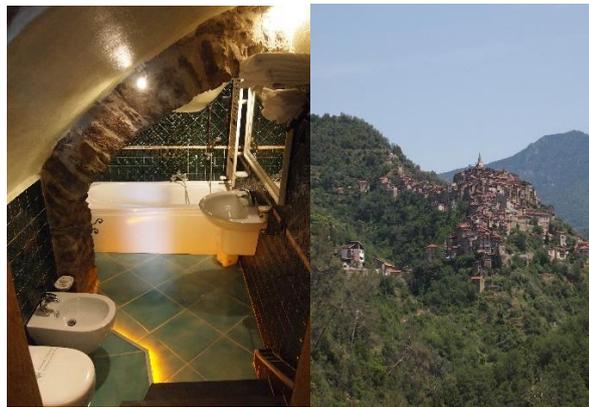
アルベルゴ・ディフーズは宿 Albergo + 拡散する Diffuso の造語で、言葉が生まれたきっかけは 1976 年、アルプス東部のフリウリ地震である。長い群発地震で過疎化が進んだ山村の一つ、コメリアンで郷土の文化への深い愛着を謳った詩人レオナルド・ザニエの着想から生まれた。垂直方向に飲食から娯楽まで詰まった近代型ホテルに対し、村全体に拡がる宿や飲食店、村全体でもてなせばいいという発想だ。被災地の圧倒的人不足の中、村の存続のための苦肉の策として点在する空き家を宿に変え、レセプションは村に一つ、食事も朝だけは地産地消のものを提供するが、基本的に近隣の飲食店を利用してもらおう。もう一つの特徴は地域のオリジナリティである。その後、各地での試行錯誤の末、最初に実現したのは、96 年、同じフリウリ地方のサウリス村だった。



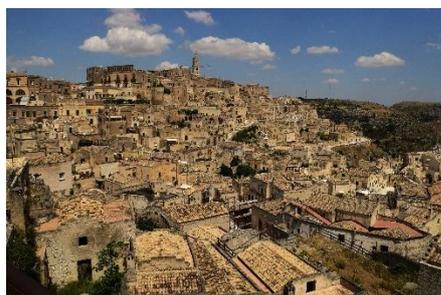
現在、国内では約 500 軒に増えたが、うちジャンカルロ・ダラーラが創立したアルベルゴ・ディフーズ協会に加盟するのは約 100 軒。アグリトゥリズムの約 25000 と比較すれば、まだまだ少数派だ。運営形態は多様で、主に行政主導の三セクによるも

の、村出身の個人による投資、行政と市民と投資家が協力したものとさまざまである。たとえば、行政が支援してきたフリウリ地方やサルデーニャ島などは簡素で経済的なものが多い。また、ロコロトンドやリグーリア州アプリカーレ村などは民間主導。中でもメディアに注目されたのは、2005年に生まれたアブルッツォ州海拔1250mの山村サント・ステファノ・ディ・セッサニオのAD。ミラノ生まれの個人が6年以上の歳月と5億円以上を投資し、空き家を改修し高級志向のホテルや飲食店に変えたことで、村だけでなく、地域全体の自然とかつてメディチ家を潤した羊毛産業の拠点としての歴史を世界に知らしめ、新たな経済活動と世代交代を促した。この村の宿が話題となり、世界遺産の街マテーラでも洞窟住居を活かした宿を展開。

ミラノの経済紙は「ADが初めて国際基準となった」と表現し、フィガロ紙は「カラ



ヴァッジョの絵のような」と絶賛した。



しかし、

地元

行政との関係は微妙であるのに対し近年、注目されているモリーゼ州カステル・デル・ジューディチェの施設は、マーケティング経済を学んだ企業家でもある町長が中心となり、自治体と市民と民間投資家が協力し、大がかりな山村再生が進行中だ。中山間地の空き家問題が深刻なイタリアでは、コロナ禍も行政主導の様々なプロジェクトが動き始めている。

本来のADの特徴として山村の維持があるとすれば、通常は稼働率55%だったアブルツォ州のADが、コロナ禍に一時90%に跳ね上がった事実は興味深い。これは大自然で深呼吸したいという都市住民だけでなく、イタリアらしい山村を守るADへの共鳴と考えられている。ただ自分だけ楽しむ旅から、旅先も豊かにする社会的観光へ

の萌芽と見ることもできる。群発地震に苦しむ能登や熊本でも、そんな旅を誘発できないものだろうか。

参考資料『スローシティ』（拙書 2013年 光文社新書）

『世界中から人々が押し寄せる小さな村』（同 2023年 光文社）

日本とイタリアに共通する空き家問題

イタリアの面積は約 30 万 km²で、日本（38 万km²）で5分の4ほどの大きさで、人口はおよそ 6600 万人で、日本（1.28 億人）の半分ほどしかいない。

現在、イタリアでは、国立統計局の 2011 年の調査では、約 700 万戸の空き家が存在し、中山間地に絞れば、約 200 万戸で、フィレンツェ大学の調査によれば、完全なる廃村は 184 だという。一方、日本の空き家は、2018 年の総務省の調べでは、約 846 万戸で、消滅集落は 2015 年には 157 村だった。

ともに深刻な空き家問題を抱えている理由は、高齢化率が非常に高いこと。2018 年には、イタリアが 23.3%、日本は 28.1% で共に一位と二位だった。出生率も低さも同じで 2017 年、日本は平均 1.43 人に対し、イタリアは 1.32 人だった。

さらなる共通項は、ともに戦後、敗戦国として生活様式の劇的な変化を経験したことである。そして、それ以上の共通項は、ともに森や水に恵まれた中山間地が多い領土である。丘陵地帯を含めれば、イタリアは中山間地が国土の7割を占め、日本もまた6割が中山間地である。（但し、農地はイタリアの場合、国土の約48%、日本は14%）

AD ソット・レ・クンメルセ

プーリア州南部の世界遺産に登録された伝統建築トゥルツリが点在するイトリア渓谷の丘の街ロコロトンド。旧市街は円形の城壁のような姿で、クンメルセは、その特徴的なとんがり屋根のこと。プライバシーのない細い階段ばかりの造りは現在の暮らしに馴染まず、空き家化が進む。88年、建築会社を営んでいたアンジェロ・シストと妻のテレサ・サレルノは、15軒の空き家を少しずつ買い取り、2000～2006年にかけて、これをホテルへと変えた。「最大の動機は、生まれた街への愛。二つめは、仕事で各地を旅するが、どこも同じで、泊まっていると孤独感に苛まれる。自分が泊まりたい宿を求めている。美しく、温かい。そんな宿なら、きっとみんなも気に入ってくれる」と考えた。「狭い路地や階段、パリやミラノの宿、ヒルトンホテルでは決して

味わえないもの。ここに泊まることで小さな集落の日常を生きることができる宿」なぜ、高くしないのかと訊くと、「僕の仕事の定義は、みんなが幸せになってくれること。それに死ぬ時に何も要らないから」と答えた。当時、旧市街には食事をする店がなかったのでピッツェリアを作り、今では4つの飲食店を開業。閑散としていた旧市街に「ウ・クルドゥン」以下、質の高いレストランが何軒も生まれ、活気づいていた。そばには、オストゥーニ、チステルニーノと「美しい村連合」が点在、海岸も近い。

資料5 欧州先進地事例イタリア農村観光の視察報告
多様な地域資源の更なる活用に関する農泊推進研究会（令和5年度）資料

